
想いが奏でる輝き 「夜空に願いを込めて」

澄蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いが奏でる輝き 「夜空に願いを込めて」

【Nコード】

N4933Y

【作者名】

澄蓮

【あらすじ】

想いが届く時、願いは叶う・・・

それは信じなくては叶わない

疑ってはいけない ただ貴女を信じる

秋から冬の変わり目の季節

辺境の中学校

3年生の”体育祭”初日に起きた事件。

それはいつかくる始まりの合図だった。

切迫した状況。取り残された仲間、教師。

動けるのは私達のみ・・・？

想希と希が出逢った最初の戦い。

二人の心は互いに切迫する・・・

「物語の前に」(前書き)

初投稿作品ですが、皆さんの心に少しでも
暖かい光を灯せたら嬉しいです。

「物語の前に」

あらずじ

” 何処まで信じられますか？
何処までは許せます？”

「朝を迎えたら、私の知っている大好きな
世界は その姿を変えてしまった」

それは、突然の出来事・・・
準備する事も、考えることも、落ち着く事
さえ許しては貰えなかった

絶望を感じることも出来ないまま・・・

私の大好きな世界は簡単にも破綻し始めた

様々な、想いが駆け巡る

窓から差し込む筈の光は、もういない

” 失って初めて感じる気持ち ”

背中を見守ってくれた太陽（君）はいない

自分の足で、体で” 私達 ”はこの世界で生きなくてはいけない

少なくとも、私の知る世界では

人の本性は本当にそうなのか？
生き物の性はさうなのか？

私は信じてる．．．必ずいると

大切な両親から貰った、想いが詰まった（名前）を心に刻み．．．
必ず、再び会える日を疑わない

”どんな暗闇の中でも、失わない想い”

それは、脆くも崩れる。

繰り広げられる、悪意に照らされ
暗闇が覆い．．．

私の心は黒く染まってしまいかけた

そんな時、私は出会った

1つの小さな輝きに

全てを諦めるには、まだ私には出来そうにない

”詩望 希”（しののぞみ）はその想いを胸に
その扉を開ける

"夢の中で";(前書き)

詩望 希>しの のぞみく

"夢の中で";

深夜、暗いベットの
中で
遠い過去の記憶夢を見ていた。

私は子供の頃から、余り子供らしくなかった
周囲との距離感を掴むのが苦手だった訳ではないけど・・・
でも、実際に

子供の頃から私は何処か覚めていたのかもしれない。

この世界に、現実感を感じれなかった。

私の小学生の内申書からある時期まで
私は同じ評価を貰っているといえる・・・

成績は優秀（例外あり）だが、人と距離をどこか置いている。
かといって、クラスにはそれとなく
溶け込んでいる・・・

中学の学年順位も最高は8位と言う
中途半端な数字、大抵10位の辺りを彷徨っていた。
運動では、可もなく不可もなく・・・女としては
ある程度の基礎能力はある程度の評価
内心ではいつも4を貰っていた。

ある程度の能力は見せて・・・本性を隠してきたと思うし、私は
とても怖かった・・・

”誰かを信賴して、裏切られる事が・・・”

だから交遊関係はいたって普通だった

中学高校は、皆、携帯の電話帳にどれだけ友人（異性）の登録人数を持っているかで

ある程度のステータスとなるなか・・・

私の電話帳には・・・連絡をしたことのないアドレスが多く登録されていた。

私はその風貌の事もあり・・・いつの間にか回りに近づくものは少なくなっていた

私は、頭で冷静に物事を考えるタイプの人間だったから、余計に孤立し始める。

心が何故かズキズキした

知らない感情の筈・・・

私は感情はない筈なの・・・

過去の暗闇を抱える私は、さらに心を閉ざし始める中

新たな風が、私を包む。

私の過去を受け止めてくれる？

そんな期待・・・そんな希望が

私を運命を変える

"前半戦"; 「体育館で・・・」

(前書き)

ひた向きなその視線は何処を見ていたの・・・?

"前半戦"; 「体育館で・・・」

「詩望・・・、今日の放課後時間ある？」

2時限目の”国語”が終わり。

ノートに何時ものように、教師のちょっとした話を織り交ぜ自分なりに書いている時、

反対側の席に居た”草実君”^{くさみ}が少し迷ったような顔で聞いてきた。

「詩望なんて・・・呼び捨てで呼ばれるの私あまり好きじゃないの・・・草実君」

その表情で、大体。恋愛系・・・（この時期になると私だって少しは気にする）の話だと言う事は嫌でもわかった。

草実君とは呼び捨てで言い合う仲ではない。
少し、嫌悪感を込めた口調で言ったのが悪かったのか。

「・・・悪かったな」

そう言い残し、彼はクラスから出ていった。

時計を見ると、次の授業まで後数分しかない
確か・・・次の授業は来月ある”体育祭”の練習。
主と言つか、男子がメインなので私達は応援するだけなのだが・・・。

書きかけのノートをしまい。
体育館へと私は足を向けた

その後ろ姿を、見る影か．．．．．いる事にきがつきはしなかった。

#「前半戦」

ハイ！ハイ！．．．．．パス

ダンダン．．．．．シュッー

このシュートは起動をそれてリングの右側に逸れる．．．．

クラスの女子、男子から溜め息が漏れる。

私はそんなクラスの言葉に耳を貸せる余裕もなく、ただコートを走っていた。

「しの！．．．．．ドンマイ！気にすんなよ！

俺がカバーするから。

ほら！皆も諦めるなよ、一緒にこの1ヶ月練習しただろ？」

ファイー．．．．．ゴー！

”体育祭”当日予選Aチーム

男子3人（バスケット部員一人）

女子2人の変則マツチ

10×4セット

現在のスコア 38対52

ハーフタイムまで後3分ちよつと。

試合時間残りも10分×2（変則セット）なのでこの点差は厳しい。

コートで、キャプテンマークの赤色の服を来ている15番の彼は声をあげて一人敵陣にドリブル突破をしてレイアップを決める。

他の私以外の3名はもはや、ヨロヨロで

ハーフコートの前で守備のみに徹し

肩で息をしながら彼を見守っている。

敵のクラス以外のチームも皆、誰もがこの試合を魅せられていた。

何せ、バスケ部員とは言え、彼は中学までバスケをやっていない初心者で何故かレギュラーを勝ち取りいつの間にか期待の新人となり、しかも去年、神奈川から急遽こんな辺境の地に転入してきた。学校でかなり色んな意味で目立っているあの”想希^{そうき}”なのだ

しかし、皆が思うのは彼のプレーだった。

想希はクラスでは評判が悪い。

それもかなり私達女子の間では……

凄い、自己中でナルシストで何を考えてるのか分からない。そんな評価だった。

実際はそこまででは無いとは思っているが……

私自信かなり驚いていた。

>絶望的な状況・追い詰められた時とき人のとる行動は本来のありのままの姿を写すく

ピー。

彼がペナルティエリア内で倒された

クラスで彼の一番の仲間であろう”卓也”が
声を上げた

「ナイス！・・・落ち着いていけ！」想”」

フリースローは二回。

先程入れたスリーポイントと合わせて

いまのスコアは 41対52
ハーフタイム終了まで・・・4秒。

しかし、前半からこの方法と速攻で確実に点を取るこの私達のチームの戦法は全て”想希”
一人でやっていた。

他のメンバーもうすす先程から”想希”がたまに顔をひきつらせるのを見ていた。

タイム！

私はついそう言い、この”馬鹿”の背中を引っ張りベンチに座らせた。

「どうした？・・・あ！

成る程！そっちか！プランBねー了解！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

何やら”馬鹿”は勝手に解釈して

審判にこう言った。

「審判、フリースロー。のぞ・・・・・・・・ミス。

”しの”に交代します」。

俺足痛めたんで・・・・・・・・良いですか？」

何を・・・・・・・・今、”のぞみ”って・・・

相棒事”卓也”がいち早く反応し言った。

「お前・・・・・・・・今、”のぞみ”って言わなかった？

まさか・・・・・・・・・・てめっ！俺との交わした友情はどこへ言った？約束しただろ？

今年も俺ら男で>ネズミ<ランド♪<行こうぜって！！！！！！！！」

回りの大爆笑と冷やかしにより

私は初めて顔を赤くして、恥ずかしい気持ちになった。

――

・・・その時、一人だけ、違う瞳の色合いをしている人がこの”馬鹿”の事を見ているとは私は思わなかった・・・・

――――

後半戦に続く。

"後半戦"; 一時(ひととき)の休息(前書き)

「それが、小さな灯だと気付いた時
もう、私は引き返せなかった・・・」

"後半戦"; 一時(ひととき)の休息

結果論で言えば、

私は一回外してしまった・・・

私としては、言い訳を言いたかったけど・・・

少なからず私の思惑は外れる、

二回目のフリースローを外し、

どよめきが起きるなか

リングから跳ね返ったボールは、足を痛めたかに思われた”想希”
によりどうに押し込める

ピー

してやったりの顔をしながら

私の元に駆け寄り、とても綺麗な手の平を目の前に出す

「?・・・どうしたの?・・・馬・・・”想希”君」

彼は私の手を掴み、その華奢な平を優しく

小さく叩いた

パン・・・

「お礼なんて要らない・・・

こちらこそ、前半最後までサポートしてくれてありがとな・・・
カッコつけさしてくれてありがと・・・

それと・・・無理はするなよ?・・・
のぞみ
希は「

彼は私の肩にもそつと手を置き
笑顔いながら去っていった．．．

”馬鹿”などと言う名前で頭の中で呼んでいた
自分に少し驚き．．．

手を触れたときに感じた暖かさに
何処と無く、彼の心の中を垣間見た気がした

> ”想希”君なら．．．．もしかしたら<

ハット頭を降る

(馬鹿．．．．今何を．．．．私は考えて)

私は自分の体と頭を冷やし少しでも体力を回復するために休憩をす
る事にした。

”前半戦”終了

前半戦スコア

43対52

その差 9 point (3 point 三分)

そしてハーフタイム(休憩)に入る．．．

クラスの仲間達のバスケット経験者や部員仲間

それに色めき立った女子が
皆、よってたかつて”想希”に近寄る。

相棒の”卓也”は私の事を見て
近くに少しより独り言を呟き始めた

「アイツさあ・・・部活時も授業の時でも
いつも待ってんだよな両親の事・・・

”詩望”・・・さん。は知ってる？
”アイツ”が何でこの学校来たか？

アイツさ・・・外側は結構怖いつてか、闇？
何て言うんだろぅな・・・

全てを見てる・・・
つてか知ってるような表情かおすんだよ

だから皆、取っ付きにくいイメージ持ってる
見たいでさ・・・

でもさ、俺見たんだよ・・・

下校途中でさ

街の中心街の一角でさ
野良猫が居たんだよ・・・結構弱つてて

ミャーオン・・・ミャー・・・

って助けを求めてる子猫なんだけどさ

皆、可愛いねとかお腹減ってる？
とか言ってるんだけど……

近寄らないんだよ。

俺も、後から気付いて……捨てられた理由と近寄らない理由も
分かったんだが

その子猫、”叉猫”

(＊尻尾が二本這えている化け猫)

とそっくりの尻尾だったんだ。 #後書き参照

まあ、不幸を呼ぶってイメージはあるし

災いとかをもたらすって皆思ってた不気味がる
その気持ちも分からはないんだが……

そんな時さ、自転車がもうスピードで駆けてきたわけよ……俺の
よく知る奴のチャリが

何やら、急いで戻ってきた見たいで……

手には牛乳を持ってたんだよ。

いや、正確には溢れた液体を被った服がな

いつもの、ヘラヘラ顔じゃなくてさ

俺つい隠れて見たんだよ。

”アイツ”多分、真っ先にその子猫を見つけて
お腹透かしてるだろうと思って。
牛乳持つてこようとしたんだろうな・・・

これも後から聞いたんだが

これも本当に馬鹿な話でさ・・・

子猫に危害を加えられないようにして、

逃がさないように

自分のバックを預ける代わりに

そこら辺にいた違う学校の女子に渡して。

見て貰ったんだって・・・

でさ・・・戻ってきたら、バックごと無くなってたんだが。

”アイツ”財布もバックに入れてたらしくてそもそも家にも入れずに立ち往生したらしくて

隣の叔母さんに頼んで牛乳を貰ってもうスピードで行くいいが・・・

・（以下略）

で、結局”アイツ”猫を牛乳まみれ、泥まみれで擦り傷だらけでも、
楽しそうに抱っこしながら帰ったんだよ。

「・・・ふふ・・・あっ」

（自然に出た笑いに私は戸惑った）

なっ・・・想像出来ないだろ？

俺は”アイツ”いい奴だと思っぜ？

でも、俺じゃまだ”アイツ”の中までは
入り込めねえんだ……

今はな……

悪いな、こんなこと言って……

お前なら……ごめん……

詩望さんなら何かできる思ってたな？」

”真田 卓也”はこのクラスの学級委員だ。

実際、かなり女子からも人気がある。

頭も悪くはないし、運動もバスケ部の

”現キャプテン”性格も絵に書くような好青年ではないが……
とても気配りがうまい

でも、私は”真田”の時々”想希”に
見せる瞳の色がすこし怖かった。

その、理由が今わかった

”想希”の事を真剣に悩んでいたのね……

楽しそうに盛り上げるその姿はいい親友にしか見えないのに……

彼”想希”の目は笑っていない気がした

コート上とはやはりかなり態度が違う

”想希”に皆もやがて失望の色に変わり……

彼は無言で体育館の見上げ、

一瞬、私の方を見た気がした

その瞳は何を訴えてたのか分からない

彼の姿はやがて見えなくなった。

その姿に、私は何か女性特有の勘なのか
もしかしたら、私を重ねたのか
彼の雰囲気”脆さ”や”儚さ””危うさ”を
感じた・・・

彼を一人にしていけない気がした。

私が側に居なくてはいけない気も・・・

"後半戦"; 一時(ひととき)の休息(後書き)

猫又の下りの話は私が実際に体験した話をそのまま使ってしまった・・・。

今では布団の中でゴロゴロいう仲です・・・

本当に出逢えて・・・助けてれ良かった

"後半戦"; 「刹那の想い・・・」

”想希”は体育館を出て、
一人本校舎に向かっている。

「何処までいくの・・・？」
試合に間に合わなくなるよ？」

私は人の名前を呼ぶのが好きではなかった
一人に固執し、距離感を間違えてしまったら

”その者の末路を、知っているから”

冷たくなってしまう。

此方を振り向かずと言った。

「主役交代・・・俺の出番はないよ・・・」

先程から気になっていた事を聞く

「足・・・痛めてなかったの？」

ある程度想像はつく。

交代枠は確かにあるし、
それは間違っていない。

けれど、先程の”卓也”の話
私の勝手な気持ち少しでる

「そうやって、いつも最後は逃げてきたの？」

”想希”は希望を持つ事を捨てたんだろうと思う。

試合中に何度も上を見ていたのは、期待があったのだろう。

「私……」

想希の振り返った、その表情と瞳の色を見て
私は……

静かに両者は佇む

天気予報では、午後からの降水確率は”60%”

少し肌寒い空気の中

私と彼は向き合い、それぞれその瞳は
違う場所を見つめていた。

刹那の様な瞬間だった

彼は、その瞳を急激に鋭くし

私に大声で叫ぶ

”————”と

そして私の元に全速力で駆ける

”どうして気づけなかったの？……私は”

彼の片方の瞳は私の背後を凝視し

もう片方は私の瞳を見ていたのに・・・

” 私が女性であることを後悔したのは

初で最後だった”

それが最

"後半戦"; 「刹那の想い・・・」 (後書き)

” 運命は、私を選んだのかな？ ”

"後半戦"; 突然の終わり、そして始まり（前書き）

その瞳はとても優しく感じた・・・

"後半戦"; 突然の終わり、そして始まり

”男”は焦った。

しかし、反対に安心もした。

何せ、俺の姿を見るや否や

猛然とこちらに走ってくるのだ。

実にお前らしいよ・・・

お尻のポケットに隠し持っていた

”ペンナイフ”を握りしめる。

”男”はやらなくちゃいけなかった決意がある
自分の未来に・・・興味がなかった。

そうさ・・・俺が興味があるのは・・・

後ろに人が居ると分かったのは、私の首に
冷たいヒンヤリとしたモノが当てられてからだった・・・

場所は、体育館と本校舎の中間点。

私は、頬から汗が少し滲み出る。

私は気付かなかったが・・・回りには、遠くでは女教師は事態を

いち早く理解し、
扉の内側に鍵をかけ二次被害を止める決断をした。

残された男数名の教師、クラスの男女数人が
気付かれないように遠巻きから、行動を起こそうとしていた。

私は、ただ”想希”の瞳しかもう写らなかった

何故なら、”想希”の瞳には燃えるような決意と想いが強く輝いて
いる瞳に心を奪われた……

”私はこの人にずっと守られたい”

『なんだお前……そんな表情出来るのかよ……ふん。格好
いいなお前の顔

……やっぱお前だと思ってたよ
最高の舞台だな……』

若い声が若干緊張している
ナイフを握る手にも汗が浮かんでいる。

私は気付かなかった……男の声が聞き覚えがあつて。その服装
も私達と変わらないのに

この男もまた理解したと私は思った、
”この男”は
触れてはいけないモノに
触れてしまったのだと

何分そうやって居たのだろうか？

誰もが彼の雰囲気飲まれてしまっていた

教師が、同級生が・・・

窓越しに、皆見ていた

ポツポツと 雨が降る

彼は静かに喋る。

「母さん・・・父さん・・・欄・・・シキ・・・ごめん
な・・・」

やっと分かったんだ・・・自分の役目。

何をしなくちゃいけないのか・・・

神様、僕を今まで・・・

生かしてくれてありがとう」

男は、内心その少年の変貌に驚いていた

ここまでの真剣な表情は、見た事がなかったからだ・・・

いつもヘラヘラしてる気持ち悪い男とばかり思っていた。

近郊を破ったのは、第三者

パトカーのサイレンの音だった・・・

そしてそれは、

ここから始まる約3日間によって繰り広げられる悲劇の始まりだった

” 3 d a y s ” に続く

始まり

本校舎・・・2F「音楽室」「楽器置き場」

「はぁ、はぁ・・・」

冷や汗と、急激な運動により
制服の下はピッタリと張り付くぐらい汗が滴っていた。

隣では、白い体操服を赤く汚し・・・痛みに耐え私の腕を強く強く
痛いぐらいに握りしめてくる。

「ぐう・・・う・・・」

私は、何があつたのかよく思い出せなかった
ただ”想希”が男に向かって飛び掛かり
私は腰が抜けて・・・動けなかった・・・

男のナイフが”想希”を切りつけ・・・

その後、教師や生徒が私達を・・・

”私のせい？・・・”

”想希”に無理矢理抱き抱えられた。
私の目のには・・・ーーーーー。

唇が渴き・・・心臓に上手く空気がいかない

ハッハッ・・・ハッ・・・ウウウ

苦しい・・・息が・・・

「そ・・・うき・・・」

極度の緊張感と恐怖で過呼吸に陥りかけた私を突然襲った！

「むぐ!?!・・・な」

覆い被さるように抱き付かれた、

彼の体は思いの外軽く、しかし私の力では支えきれずだんだん体制がくずれ

押し倒されるような形に・・・

”怖い・・・嫌・・・こんなの・・・”
色々な思いが駆け巡る

しかし、私の読みは外れた。

彼の以上の体の暑さ

そして何時まで経つても想希は動かない。

私は彼を揺らしながら小さな声で喋る

「想希・・・ねえ・・・どうしたの？
私の事助けてくれたじゃない・・・
想希の事少し分かった気がしたのに
嫌よ・・・また・・・」

過呼吸など私は忘れて、涙が溢れてきた。

もうそんな目で見ないから・・・、
いつもは冷静で、思考しない！
醒めた瞳で世界を見ようとしなない・・・、

「それは初めて心から叫んだ言葉だった」

「・・・私を置いて一人にしないでよ・・・」

涙がポタポタと想希の顔へ落ちる。

血で汚れた顔を拭き取るかのように・・・

未だに想希は目を冷ましてくれない

時おり呻き声のような声をあげるだけ・・・

危険な状況なのは

彼の腹部に滲む、赤い血の後を見ればわかる

ここには、幸い隣の部屋が給仕室で
あった為・・・

私は自分の体操服を千切り、水で浸し彼の頭へ乗せ。
残りの殆どを包帯がわりにして

彼のお腹に巻き付ける髪留めでなんとか取れないように出来た・・・

私の髪留めは・・・大切な姉からの贈り物。

今も鬪っている姉さんの・・・想いが詰まってる

こんなところで私は負けられない。

私はもう人に迷わない・・・

緊張感が緩んだのか、それとも私は安心したのか・・・

寒さを凌ぐように・・・楽器に掛けられていた薄い布と一緒に彼の体を暖めるようにして眠りについた。

"それは突然やって来た";

薄明かりの中で、私は夢を見ていた。

とても、とても懐かしい夢を．．．

いつもの音色が聞こえてくる。

あれ？何だか違う響きの音がする．．．

私の大好きな曲の音じゃない．．．？

それに今日の音色はいつもより少し下手？

けれど．．．何だか繊細で．．．でも寂しい？

儚い音．．．だけどその想いがとても優しく

暖かくてポツかりする．．．

え．．．と．．．

この感じ．．．何だか．．．

「う．．．ん．．．”ひか”．．．」

朝の眩しさと共に、

静かに響く音色が隣の部屋から聞こえた。

私は走って隣の部屋に駆け込み、まよわず
その背中に優しく駆け寄る．．．

「・・・・・・・・!!!!よかった・・・・・・・・」

私よりよりホンノ少ししか変わらない

その身長・・・・・・・・髪もボサボサで、性格も最悪

自己中心的でナルシスト？・・・・・・・・

協調性に駆ける？

・・・・・・・・そんな事ない。

”だって、命を懸けて迷わず

れた・・・・・・・・”

私を救ってく

何時までそうしていたのか・・・・・・・・

静かに彼・・・・・・・・想希は喋る。

「下手くそな演奏だった？・・・・・・・・ごめんね起こしちゃって」

その声は、いつもより澄んでいて

とても綺麗な声に聞こえた。

「コク・・・・・・・・（首を振る仕草）

”想希”君・・・・・・・・ヴァイオリン弾けたのね・・・・・・・・」

私の姉と同じ・・・・・・・・

「詩望さん・・・・・・・・怪我はしてない？

俺、あれからよく覚えてないんだ・・・・・・・・

それとありがとう怪我を……
こんな事までしてくれて……」

布をもう一枚、私に被せる。

「ごめんね……服……目閉じてるから。
そこに、制服……」

「……」！！」……」

体を布で隠す。

男の人の前でこんな姿なんて……

急いで、服のある所まで駆け寄り、
小さな声で呟く。

「……見てないよね」

今年で15才にしては
体型にはまだ、自信がないのは事実。
身長はあるのに……。

「そうかな……中身だと思うよ」

耳がいいのか、独り言のように喋る。

「……コホン、もういい大丈夫。着たから」

少し揺るいわりに、
私の身長に比べて少し

スカートが短くて気になるけど……
想希は好きなのかな？……

私は、今回の事でかなり性格が前向きになっていた。

そして、想希の事を当たり前の様に考えていることに不思議と疑問に思わなかった。

「！……」

想希がこちらを向いた瞬間、固まっていた。

私は首をかしげる……。

「……？」

想希……君……？

「君の……笑顔守るから」

風が窓から私達を包んだ気がした。

この今の状況も、世界も、この瞬間だけ
私の心は1つで満たされた……

ああ、私はもう戻れない。

でも想いに火を灯したら……前を向ける？

姉さん

”私が見つけたかもしれない・・・”

まだ、それは小さな小さな、灯火。

僅かな安息（前書き）

何かを．．．誰かを．．．好きになる事。

想う事、願う事

私達は愛を捧げることしか出来ません．．．

与えることは出来ても．．．

それは、哲学でも、科学でも数式でもない
でも世界の全ての生き物が知っています

人間は表現が得意じゃない

生き物は皆、有りのままを
今を生きていると．．．思いました。

言葉も考えも要らない。

世界の全ての命に愛は注げないけれど．．．

私は今を、全力で愛したい。

最後の時まで

M y b e s t f r i e n d

僅かな安息

この一日の間で、私達の距離は縮む・・・

人は一瞬で理解し会える

そして、些細なことでその繋がり解れる

自信ないな・・・私は

私も、彼のように幼い頃・・・母にピアノを習っていた。

音楽はその人の心を表すと

表現力とは経験と想いをよって響く

演奏には technique > 技術くが必要

どんなに想いがあっても、伝わらない。

それは言葉とも、人の繋がりとも似ている

私はその表情や響きに込められた
気持ち言葉をにする。

感情的な時の響き 高圧的な音色

悲しい時の響き 静かな音色

嬉しい時の響き 明るい音色

人の声も”1つの楽器”だ

私の声は彼にどう響くのだろう？

彼の旋律からは暖かい響き、愛を感じる。

私はその後も、”想希”の声を隣で聞いた。

これで最後かもしれない・・そう思ったから
いっぱい、いっぱい話がしたかった

”想希”には、家族も親戚も居ない。

この中学校に来た時の彼の佇まいや雰囲気は
とても酷かった・・・

とても暗い、出口のない中でさ迷う

転向してきた時は私は、

居なかったから分らない。

私もいつか、彼の闇を見るのだろうか？

彼の響きは暖かく私を包み

私は初めて、

安心して心を預け・・・再び微睡みの中へと

名前と言っている方

う．．．ん

空いた窓から入ってくる秋の匂いに乗って．．．冬の寒さが混じる
風に頬をうたれ
私は眠りが覚める。

パツチリと開かない覚醒しない瞳で辺りを見回すと、どうやらそれ
程時間は経っていないみたい。

．．．スウー．．．スウー．．．．．zzzzzz（想希の寝息）

私達は互いに仲良く、こんな時にまで
寝ていられるぐらい余裕を取り戻した。
そう、解釈しておこう．．．うん

心を体もかなり回復した。

いい加減、想希などと呼ぶのは嫌になってきた．．．私だけの
ぞみと呼ばれてるのに．．．

（不満）、隣で静かに寝ている彼に向かって
色々言ってみる．．．どの呼び掛けで目覚めるかな？

（そうき．．．．．そう？．．．そき．．．．．そうちゃん？
そうき君．．．．．その．．．．．そきちい．．．．．）

「．．．」のぞむ．．．くん

こうして見ていると、まるで眠り姫の様．．．

”君はなんの夢を見ているの？”

”その中に私はいるのかな？”

壊れた世界（前書き）

永遠に続くものはない
だから、今を生きられる

壊れた世界

それは、現実への回帰。

リリリリーー！！

目の前にはいつもの白い天井。

再びの目覚め、意味のない世界へ
私は戻ってきた。

あれから何度後悔したか・・・私には分からない

けれど・・・、時と言うものは怖い。

私の心の中にある、記憶・想い、はこの4年と言つ歲月の中で、少しずつ色褪せていった。

私の名前は、

詩を望むで「詩望 希」（しの のぞみ）

今年で19歳と2ヶ月。

現在は、新都から約10キロほど離れた
所に住んでいる。

ギリギリ安全圏内、C級汚染区域。

ボロボロの、石の建物。

かつては病院だったのだろうか？

今は見るも無惨な姿へと変貌している。

ここに滞在するのも今日で10日目。

そろそろ、ここも危険だ・・・

何処にも所属していないフリーの女性。

それも、若い女性など・・・

ペットボトルの水、汚染されていない水を頭につけ、意識を覚醒させた。

(・・・よし)

過去の地図を広げ、今の場所に新しく×印をマークする。

地図の至るところに×印がマークされているのを見ると、かなりの場所に彼女が行った事が窺える。

長い黒髪を後ろへ縛り、更にそれを縛る。

彼女の髪は綺麗な漆黒の光沢を放つ。

動きやすい、服装。

下は迷彩柄の軍用服、上は黒の伸縮自在のシャツの上に少しお洒落なベストを着る。

長い睫毛に切れ長の相貌、少し頬が痩けていても、強烈な力を放っている。

何が彼女をここまで変えたのか？

それを語るのは、もう少し先になりそうだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933y/>

想いが奏でる輝き「夜空に願いを込めて」

2011年11月23日21時56分発行